演題　5

唾液腺基底細胞腺腫の細胞像 - 多形腺腫との比較 -

熊本赤十字病院　病理診断科・部

○境　一（CT）井上　佳那子（CT）山下　祐（CT）吉満　千恵（CT）

大塚　幸二（CT）坂本　康弘（CT）福田　精二（MD）長峯　理子（MD）

【はじめに】

唾液腺の基底細胞腺腫は全唾液腺腫瘍の 1.8～7.5%を占め、多形腺腫とワルチン腫瘍に次いで頻度の高い腫瘍である。約 70%が耳下腺に発生する。60 歳代に好発し、やや女性の発生頻度が高い。細胞診において頻度が比較的高い割には、多形腺腫との鑑別がしばしば困難なことが多く、その細胞像を理解することは唾液腺穿刺細胞診を行う上で重要である。今回我々は、2016 年から 2017 年にかけて 4 症例を経験したので、その細胞像を多形腺腫と比較してみた。

【対象】

対象は 2016 年 1 月から 2017 年 12 月までの 2 年間で、手術検体による組織診断で基底細胞腺腫と診断された 5 症例のうち、術前の唾液腺穿刺吸引細胞診において十分な細胞量が採取されており、検体適正とされた 4 症例を用いた。細胞像の比較対照として、同じく、手術検体の組織診断で多形腺腫とされた 4 症例を用いた。

【検討項目】

それぞれの症例に対して、背景の異染性物質量、細胞集塊の大きさ、集塊数、重積性、腺管構造の有無、孤在細胞の有無、円形細胞量、紡錘形細胞量、形質細胞様細胞の有無、細胞境界、クロマチンパターン、核小体の有無の 12 項目を比較した。

【結果】

背景の異染性物質は基底細胞腺腫において 4 症例とも細胞集塊周囲に少量しかみられなかったのに対し、多形腺腫では 1 症例を除く 3 症例で比較的豊富に観察された。採取されている集塊数は基底細胞腺腫が平均 8.5 集塊で集塊径の平均が 337.45μm であったのに対し、多形腺腫では集塊数が 24.3 集塊、集塊径が 265.6μm であった。集塊での細胞重積性は基底細胞腺腫の方がやや多いようである。腺管構造は基底細胞腺腫で 2 症例に少数、多形腺腫で 2 症例にみられた。孤在性細胞は基底細胞腺腫ではほとんどみられないのに対し、多形腺腫では少数ではあるが観察された。腫瘍を構成する円形細胞量は基底細胞腺腫でその割合が多く、間質細胞を思わせる紡錘形細胞は多形腺腫でその割合が多かった。また、多形腺腫では円形細胞の細胞境界が比較的明瞭であるのに対し、基底細胞腺腫では不明瞭であった。形質細胞様細胞は基底細胞腺腫ではみられないが、多形腺腫では 4 症例ともみられた。クロマチンパターンは細～微細顆粒状のものが多く、差異はなかった。核小体は多形腺腫の円形細胞によくみられたが、基底細胞腺腫では不明瞭であった。

【考察】

基底細胞腺腫は好酸性の腺上皮細胞と基底細胞の二相性を示し、腫瘍巣間には間質細胞が混在する腫瘍で、胞巣周囲には好酸性硝子化基底膜物質を伴う。多形腺腫は腺管とそれを取り巻き増殖する筋上皮細胞、粘液に富む粘液腫あるいは軟骨様間葉系成分の混在を特徴とする。両者は組織像において異なる像を示すが、細胞診において円形細胞の増殖性集塊と集塊内や周囲の紡錘形細胞、Giemsa 染色で異染性を示す物質がみられ、判定に苦慮するときがある。今回の検討で、基底細胞腺腫の円形細胞がより結合性が強いのか、集塊が大きく、重積性も強かった。多形腺腫では孤在性細胞や形質細胞様細胞が観察され、円形細胞の細胞質境界が明瞭であるのが特徴的である。Giemsa 染色でみられる異染性物質は多形腺腫では時に多量に観察されるが、基底細胞腺腫では基底膜様物質であるので、細胞集塊に少量であるのが特徴である。

【まとめ】

基底細胞腺腫と多形腺腫は時に判定に苦慮するが、細胞の結合性や構成細胞の量、異染性物質の量の観察で判定可能である。